

## <書評論文>

# アメリカにおける 若者育成プログラムのパラダイム転換

Delgado, Melvin,  
*New Frontiers for Youth Development  
in The Twenty-First Century.*  
(Columbia University Press, 2002)

木 下 敬 介

### 序. 書評の意義：我が国の状況を顧みて

344万人。我が国におけるフリーターの人数を示す数である。若者独身者の5人に1人がフリーターである計算になる。1997年の酒鬼薔薇聖斗事件以来、若者による凶悪な事件がマスコミで大々的に取り上げられてきたが、その過熱報道もいまや下火になりつつあり、代わって問題の俎上に載せられたのが、フリーターである。しかし、フリーター問題に代表される昨今の若者問題はその輪郭さえ判然としない。若者の過剰な暴力性を問題視し、若者をその暴力性から語る間は、若者をいわば社会の病理現象として定式化することができたが、若者による凶悪犯罪が激減しているとの報告もあり、若者をどのように把握していくのかというパースペクティヴは現在明確になっていない。フリーターになる若者の何が問題なのか、なぜ問題なのか、そもそも問題なのかについて、十分に説得力のある説明がなされていないのである。一方、我が国よりも遥か以前から若者問題に直面し、その理論的分析と実践的解決に取り組んできたアメリカでは、ソーシャルワークの分野において、若者への新たなパースペクティヴが提唱されている。本書は、その新しいパースペクティヴ提唱の旗手であるデルガドの新著であり、本書の主張は我が国における若者への模倣としたパースペクティヴに重要な示唆を与えるであろう。

## 1. 本書の視座およびその背景：シカゴ学派のパースペクティブとの比較

本書の著者デルガドはソーシャルワーク界の異端児である。彼は空軍在籍中に大学をほぼ修了し、その後コロンビア大学大学院でソーシャルワークを学ぶ。彼の研究事績を辿れば、ラテン系ギャングの研究からマイノリティの若者のドラッグ使用の研究に至るまで、いわゆる「解体地域」に研究対象が集中していることは明らかである。しかしその研究対象に反して、デルガドの関心は常に、コミュニティにおいて若者を逸脱へと誘う負のファクターというよりはむしろ、それとは逆のファクター、つまり若者に利益をもたらす要因へと注がれていた。このような著者の姿勢は、シカゴ学派とその影響を直截に受けたアメリカ・ソーシャルワークのパラダイムと真っ向から相対するパースペクティブを本書において提示するに至る。周知の通り、シカゴ学派は人道主義的社会改良主義と不可分なものとして誕生した。シカゴ学派第一世代に属するヘンダーソンの関心を分析した秋元律郎によれば、「そこでの関心は、現実には多くの社会問題をうんでいる都市の発展の諸条件にかかわる要因は何であり、またそれらの諸条件は産業の都市的構成にとって固有のものなのか、さらにそれらの諸条件は既知の手段によって改良されうるのかどうか、といった諸問題にむけられている。」(秋元 1989: 33) このような経緯で誕生したシカゴ社会学であったが故に、爾来シカゴ学派とシカゴ学派に源流を持つアメリカのソーシャルワークは、若者を逸脱から救う対象とみなすパラダイムの下に発展することになるのである。もちろん、直接的に社会改良主義を掲げていたのはシカゴ学派の第一世代までの話であり、その実践性ゆえに科学としての客観性に欠くとの批判に晒されたシカゴ学派は、第二世代以降、科学的客観性の確保を目指し、社会改良主義との訣別を果たすのである。しかし、シカゴ学派第二世代以降、社会改良主義が排されてきたとしても、若者を逸脱の可能性を孕んだ問題とみなすパースペクティブが放棄されたことをそれが意味するわけではない。それどころか、シカゴ学派は、素朴な社会改良主義を回避しつつも、社会改革、社会運動、社会病理などの隣接領域をつねにその学際的ネットワークの内に取り込んできたのであり(船津 1999: 71)、それらの諸領域に通底する若者への理論的パースペクティブを保持していたと考えてもなんら不思議はない。

以上のようなパースペクティブに対して、デルガドが新しいパースペクティブを提唱する背景には、いまだ激しく変動を続けるアメリカの人口統計学的状況がある。合衆国国勢調査局の予測によれば、2000年から2010年までの間に13歳から19歳までの人口は約2倍に跳ね上がる。さらに、2050年までにアメリカ居住者の大半は有色人種になると見積もられている。こういった状況は、本書の存在意義を問う根本的な問いに答えるものである。す

なわち、「アメリカが経済的・社会的発展を望むとき、なぜ若者を無視することができないのか？」という問いに答えるものである。著者は従来のパースペクティブではもはや現在以後の状況に対応できず、若者への新しい社会的パースペクティブが要請されていると説く。都心の再生産過程に組み込まれたひとつの問題・逸脱への社会的圧力に晒される存在として若者を捉える従来のパラダイムから、若者を顕在的・潜在的に社会に貢献する社会資産と見るパラダイムへの、パラダイムシフトが必要であると言うのだ。この新しいパラダイムの下で、ソーシャルワークは逸脱の予防・治療という役割を超えて、社会を豊かにするための資産を育成するというより積極的な意味を付与される。だから、本書においては、「ソーシャルワーク」ではなく、《若者育成》（Youth development）という言葉が好んで使われている。著者が敢えてこの言葉に拘るのは、単に新しいパースペクティブを意識しているからだけではない。新しい若者観を設定するにとどまらず、若者育成の新しい領域を切り拓こうとしているのである。つまり、若者育成がどのような機関を巻き込みどのような活動を推進することによって、従来のソーシャルワークとの違いを実現していけるのか、を提示するつもりなのだ。そのために著者はまず、若者育成の新しい定義づけを試みる。それは次の3点に集約されるが、特に②に注目したい。

①若者を社会的・倫理的・情動的・肉体的・認知的に能力のある人間にし、その生活を豊かにするプロセス。

②地域社会の中で起こり、それ故コンテキスト依存的なプロセス。

③若者は干渉するターゲットであると同時に実行パートナーでもあるようなプロセス。

しかしこの種の定義は、特に定義の②は、それ自身、明確に固定された単一定義への収斂を拒むものである。コンテキストに依存するということは、状況次第で定義が変化することである。例えば経済格差のある2つのセクター間では、同じ若者育成プログラムが違ったものとして発現するであろう。だが、この柔軟性こそが新しい若者育成に必要なものであり、著者は、むしろ単一の定義に収斂させてはならないと言う。

さて、最後に、このような本書のパースペクティブに対する本稿の視座と今後の章展開を述べておく。まず、本稿の焦点は次の二点にある。①若者を問題と見るパラダイムから若者を社会資産とみなすパラダイムへの転換は可能であるのか②デルガドの主張する若者育成の新しい領域がどの程度有効であるのか。この二つの関心の下に、第二章ではデルガドが構築した若者育成の理論的枠組みを、第三章では新しい若者育成の領域のケーススタディを紹介し、終章においてそれらを批判的に検討する。

## 2. 若者育成の理論的枠組み：コンピタンス、ドメイン、評価

デルガドは若者育成をコンテキスト依存的なプロセスと定義したが、この章では、その若者育成が考慮すべきコンテキストとは何なのかを述べた後、若者育成の理論的枠組みであるコンピタンス<sup>(1)</sup>、ドメインについて、さらには若者育成の実践的プログラムの評価について順次検討していきたい。まずデルガドは①文化的多様性②ジェンダー／性的嗜好③障害の三つを特に重要なコンテキストとして位置づけている。第一に文化的多様性は、様々な人種／民族が入り乱れるアメリカにおいて、無視できないコンテキストである。有色人種あるいはラテン系白人の若者が、自身の文化的歴史や伝統を知ること、集団のメンバーとしてのアイデンティティを養うこと、所属集団に対して肯定的態度をとれること。これらを手助けする形で若者育成が進められなくてはならない。しかし、若者育成が直面するコンテキストはそれだけではない。ジェンダーが若者育成プログラムの在り方を左右する決定的ファクターであるのは無論のこと、ゲイやレズビアンやバイセクシャルの若者がそれぞれのコンテキストにおいて十分に若者育成の効果を享受できなければならないし、障害者についても同様である。

こういったコンテキストへの配慮に言及した後、著者は若者育成を理論的にどのように把握し分析するかという中心課題へと話を進めている。すなわち、若者のどのようなコンピタンスを伸ばし、どのような他者との関係性においてプログラムが遂行されるべきかが提言される。最初は、若者育成プログラムが対象とすべきコンピタンスである。これには①認知的コンピタンス②情動的コンピタンス③身体的コンピタンス④倫理的コンピタンス⑤社会的コンピタンス⑥精神的コンピタンスの六つが計上されている。認知的コンピタンスは、社会一般の見解として、「頭の切れ」・「知能指数」・「学業成績」・「知性」と同義であるが、著者はこの見解を斥ける。アメリカ社会は認知的コンピタンスをあまりにも狭義に捉え、強調しすぎるが、著者はより広義なコンピタンスを育てねばならないと言う。W.T. Grant Consortium on the School-Based Promotion of School Competence (1992) の定義を借りれば、「自己対話、社会的手がかりの読解、問題解決と意思決定のために足跡を利用すること、他者のパースペクティブを理解すること、行動規範を理解すること、人生への正の態度、自分を知ることといった認知的技術を発達させ運用するための

---

<sup>(1)</sup> 「能力」の意味であるが、デルガドは獲得することが若者育成の目的となるような能力、あるいはその獲得プロセスによって若者育成が定義づけられるような能力を特に“competence”として、能力一般を示す“ability”や“potential”の語と区別している。それ故、本稿では著者の意志を尊重する意味で、敢えて「コンピタンス」とした。

能力」なのである。情動的コンピタンスは、自分の気持ちを同定し、適切な情動を表出する能力であり、自己を制御し、動機づけ、他者との関係を樹立・維持する能力である。身体的コンピタンスは健康であることだが、コンテキストに大きく依存している。つまり若者は、日々の食事行動から短期リスクに直面し、年単位の食習慣から長期の慢性疾患に遭遇する。倫理的コンピタンスもコンテキスト依存性が高い。どのような種類の行動が倫理的あるいは非倫理的と考えられているのかということは、コミュニティによって異なっているからである。また、どんな若者でも倫理的コンピタンスを潜在的に備えているという前提に立たない限り、若者育成は存在意義を持たないのだが、その開花もコンテキスト依存的である。社会的コンピタンスは、社会的・対人関係的目的を達成するための能力で、一般に「あの人は社会性がある」と言うときの社会性のことを指す。より具体的には、他者と前向きな関係を樹立する能力、共感する能力、コミュニケーション技術、社会的手がかりを正しく読解する能力、柔軟性、問いを確定する能力などがこれにあたる。最後に、精神的コンピタンスである。本書の定義は、Cervantes and Ramirez (1992) の定義「存在の目的と使命を斟酌する意識の超越的レベル。調和と全体性の探究。世界における偉大な全愛的存在への根源的信仰。」に準ずる。しかし、精神的であるためには、必ずしも宗教的である必要はない。

さて、若者育成のプログラムは、どのような他者との関係において実行されるべきなのだろうか。筆者が重要視するのは、①家族②学校③仲間集団④地域社会の四つのドメインである。

①**家族**：家族が若者を取り巻く最も身近なドメインであるというのは、伝統的ソーシャルワークの文脈においても合意されてきたことだろう。しかし、ここ50年のアメリカ家族の変化は、この自明のドメインを遥かに複雑で難しいものにしている。つまり、独身女性が家長を務める家庭、ゲイやレズビアン家庭、祖父母や兄弟が家長である家庭など、伝統的な家庭の定義では対処しきれないタイプの家庭が多数派になりつつある。家族の定義は混乱しているのである。

②**学校**：若者にとって学校における人間関係から受ける影響は大きい。それ故、学校は一貫してソーシャルワークのターゲットとなってきたのだが、部外プログラムが学校に食い込むことは常に至難の業である。特に新しい若者育成が掲げる理念、すなわち認知的コンピタンスの射程を拡大すること、若者の積極的な意思決定を奨励することは、伝統的な学校のディシプリンと使命（学業において優秀な人材を育てる）に真っ向から衝突する。

③**仲間集団**：仲間集団は他のドメインと領域的に重なることが多いドメインである。例

えば、学校における仲間、地域社会における仲間を持つのは普通に起こりうることである。仲間集団は年齢によって所属集団が決まったりその在り方が決定されたりするが、ジェンダーやエスニシティ、階級によってもその所属の仕方や性格が大きく左右される。デルガドは、仲間関係が上手く締結・維持されれば、互いに尊敬し協力すること、他者の話を受容すること、アイデンティティを正しく形成することなど、様々なコンピタンスの養成に貢献できると主張する。しかし、仲間関係にはプログラムが介入し、コントロールされることが必要であるという。

④**地域社会**：「リスクを負った」若者の割合が高い地域社会はリスクが高い地域社会であるというラベルを貼られることが多い。このような地域社会へのバイアスのかかった見方は、若者を社会資産と見るパースペクティヴに転換されねばならない。地域社会の悪影響から若者を守るというよりは、逆に若者が地域社会の潜在能力を引き出すこともあるという認識を持つべきなのである。

以上のような本書の理論的前提が出揃ったところで、これらのドメインやコンピタンスに基づいて設計された実際のプログラムの検討に入りたいところだが、その前に著者はプログラムの評価について語っている。若者育成プログラムの評価は次の三つの問いに沿って行われる。

- ①そのプログラムは表明した目的を達成しているか？
- ②そのプログラムは誰のために作用しているのか？
- ③そのプログラムはどのようにすればより良くなり、コスト面で効率的になるのか？

このような評価はアカデミズムによって引き受けられることが多い。その理由は、方法論のデザインや問題構成において、現場の人間が得られるインプットがそのほかにほとんどないからである。だが、評価がアカデミズムにとっても重要であるのは、若者育成における学術研究の存在意義に及ぶ根本的な問いが根底に横たわっているからである。つまり、若者育成プログラムを促進するにあたって、学術研究はどんな役割を果たしうるのか、また果たすべきなのか、そもそも役割が存在するのか、という問いである。

### 3. New Frontier Settings：若者育成の新しい実践の場

デルガドは、ケーススタディを通して、アメリカで試みられている最新の若者育成プログラムを評価し、そこからいくつかの原理を引き出している。この最新の領域は、《new frontier settings》と呼ばれ、最初に定義が示されている。

「これらは地域社会内の組織であり、そこでは住民にサービスが提供されている。このサービス

は広範囲に及び、教育面と娯楽面を持つ。使命を遂行するために、それらの組織は、若者を財産あるいは特定の年齢集団とみなす（中略）。しかし、そうする場合、若者は何らかの形態で準備をすることが要求される（訓練やメンタリング）。」（Delgado 2002：162）

この定義で想定されているのは、具体的にはどんな組織なのかと言えば、①博物館・美術館②図書館③サイバースペース④水族館・動物園⑤野外活動である。定義はこれらの組織が実際に行っているプログラムから導き出されたものであろうが、著者は博物館や水族館のどんな活動に触れて、それらを《new frontier settings》として認識するようになったのだろうか。著者の挙げているケーススタディを検討してみれば最も分かり易い。

マイアミは人口の63%をラテン系が、27%をアフリカ系が占めており、若者の人口比率が高い。そういった環境にあって、若者育成プログラムに力を入れている博物館がある。マイアミ科学博物館がそれで、主なプログラムは①IMPACT (Integrated Marine Program and College Training) Upward Bound ②SECME RISE (Raising Interest in Science and Engineering) の二つである。前者は、海洋をフィールドとする活動が即大学入学のための訓練となっているのが特徴だが、さらに①放課後チュータリング②土曜学級③夏期プログラムの三つに分かれている。学年度中の放課後には、数学と科学のチュータリングが行われ、調査・宿題のためのコンピューターラボが開放される。参加者は、英語（マイアミに住む若者のほとんどは英語が母語でない）・会報発行・ウェブサイト作成・造園などの講座から2～3講座を選んで受講する。土曜学級とは、プログラムコーディネーターとの最低年1回の面談と、毎週土曜のグループセッションを柱としたプログラムである。家庭・学校・個人的な原因から若者が抱える諸問題を検討するのが目的である。グループごとに調査活動を進め、パワーポイントを使ってプレゼンテーションをしなければならない。夏期プログラムは、海洋に関する授業とフィールド活動から成っている。参加者はチームに分かれて、地域の海岸生物を研究する。後者は、ジェンダーに特化した活動で、中等学校女子の数学や科学における自尊・自信を増進することを目的とする。4週間のサマーアカデミーが二つあり、4チームに分かれて4人のメンターが面倒を見る。さらに皆勤した参加者には300\$が支給される。具体的には、①ウェブサイトの制作（個人用とチーム用の2つ）②模型橋の作成、レゴロボットのプログラミングなどの2つの活動が展開されてる。プログラムスタッフは、数学・科学・工学を専攻する大学生が務める。

他のケーススタディも少し覗いておくと、ニューイングランド水族館では、18歳以上を対象としたボランティアプログラム、インターンシッププログラムが実施されている。ボランティアにも週1回以上の終日勤務が課されており、各ボランティアは水質分析、獣医室補助、グラフィックデザイン、観光プログラムその他諸々の部署に配属される。また、

メキシコ美術中央美術館はラジオ局を開設しており、若者に企画・運営を任せている。参加者はジャーナリズムやラジオプログラミングについての講座を受け、自分たちで放送番組の一切を制作し、メキシコ人アーティストのプロデュースを手がける。

以上のケーススタディを通して、《new frontier settings》の原理が浮かび上がってくる。まず第一に、若者が参加できる環境を整えること。若者を参加させられるかどうかは、プログラムの目的にとって死活問題である。これらのプログラムは、若者が楽しみながら学びやすいように相当の配慮がなされている。いきなり長期間のコミットメントを求めず、短期間のプログラムが用意されているのもそうである。著者は、今まで若者に馴染みなかった図書館や博物館といった機関がイメージ転換することの重要性を説いている。第二に、若者が安定した雇用に繋がる知識や技術を身につけられること。これはプログラムの目的に直結している。より良い職につくために要求されるコンピタンスを磨くわけである。特にアメリカでは全職業の60%がIT技術を必要とする（Lazarus and Lipper 2000：1）から、ITへの取り組みは重要視されている。第三に、ジェンダーやエスニシティに配慮し、損失を与えるバイアスを除去すること。本書の登場背景に最も関係する原理である。国民の多くを占める部分が逸脱行動に走ると、当然その国の繁栄は危うい。第四に、若者の意思決定を尊重すること。プログラムをトップダウンで押し付けるのではなく、若者がプログラムそのもののデザインに参加できること。これは、歪んだ若者を鋳型に嵌めて矯正するというパースペクティブからは生れない発想である。第五に、若者と地域社会が相互補完的に能力を高めること。博物館にせよ水族館にせよ、ひとつの地域社会に密着した機関である。プログラムを通じて参加者は地域社会と関わり、成長する。逆にボランティアやインターンシップは地域社会へのサービス提供となり、若者の変革は地域社会の変革に繋がる、と著者は言う。

#### 4. 結 語

以上、本書の概要を検討してきたわけだが、先に述べた本稿の視座に照らせば、いくつかの問題点が浮上する。まず、パラダイムシフトの可能性という視点から、プログラム評価の問題が問われねばならない。第二章で概観したとおり、デルガドはプログラム評価をアカデミズムの仕事として位置づけているが、ここでデルガドが言わんとしていることはおそらく、最初に掲げられていた、あのパラダイムシフトであろう。アカデミズムが評価という作業を引き受けることによって、実践の現場を支配するパラダイムを転換する、それこそが本書の二重のテーマである。著者はケーススタディの評価を通じた若者育成のバ

ラダイムシフトと、ソーシャルワーク等の実践の場に向かい合うアカデミズムの存在理由明示といういわばメタレベルの提言とを目論んでいるのだ。しかし、ソーシャルワークという分野において、このような形のパラダイムシフトが成功するかどうかについては疑問が残る。たしかに、クーンが指摘するように、パラダイムシフトはその原義において、科学者によって担われるはずのものである。通常科学では解決できない変則事例が蓄積され、それが一定の閾値を超えたとき、旧パラダイムは科学革命へと向かう。だが、科学者の成果が社会の構成員によってそのまま受容される他はない自然科学とは異なって、若者育成は常に相手との対面的コミュニケーションが実践の核となっている分野である。プログラムがいかに新しいパラダイムに基づいて設計されようとも、対象となる若者やその家族や仲間や地域社会の住人が新しいパラダイムを受け容れなければ、それは正常に機能しないだろう。若者育成のプログラムがどれほど家庭や地域社会に左右されるかということは、デルガド自身が繰り返し主張していることである。

次に、若者育成の新しい領域の有効性という観点から、第三章で述べた《new frontier settings》の原理について考察すると、第二原理と第四原理は技術論的な課題であるので、個々のプログラムの努力次第で充分に実現可能だと考えられる。第二原理に関しては、プログラムが労働市場のニーズを把握できているか、カリキュラムおよび指導法は適切か、ということが、第四原理に関しては、若者がプログラムデザインに参加できる制度があるか、その制度は上手く機能しているのか、ということが争点になるだろう。しかし、第一、第三原理に関しては、現実の社会状況に対して有効な成果をあげることは至難であると言わなければならない。第一原理、第三原理のように、一般の人々が抱くイメージやバイアスを転換するためには、相当の広範囲をその影響下におくことが要求される。第一原理の場合では、少なくともひとつの地域社会全域を対象としてプログラムが成功しなければならないし、第三原理の場合においては、ジェンダーやエスニシティに関わるバイアスという、様々な学や運動が挑み続けていまだ一筋縄ではいかない国家規模の難題に挑戦する以上、合衆国全体を対象とせねばならないのである。第一原理についてはまだしも、個々の博物館や水族館に第三原理が言うような大規模の問題を課すのであれば、そのプログラムの有効性は極めて小さくなると言わざるを得ない。最後に第五原理である。デルガドは若者の変革を通して地域社会の変革を目論んでいるが、ある地域社会に住む若者のごく僅かしかそういった活動に参加していない現状を鑑みると、これは聊か楽観論に過ぎるように思われる。若者の変革が地域社会の変革に繋がるためには、相当数の若者をプログラムに巻き込むシステムが必要であろう。

このように、本書で目論まれているパラダイムシフトやそこから導かれるプログラムを、

その実行可能性の下に検討してみると、現実には立ちどころの障害の大きさに気付かされる。しかし、本書が提示したパースペクティブの新しさは評価されて良いし、将来的にこういった視角がソーシャルワークに大きな成果をもたらす可能性はある。従って、本書で主張されるパラダイムやプログラムを実践の場で充分通用させるための個々のアプローチが、この分野における今後の課題となるはずである。

## 参考文献

- Lazarus, W. and L. Lipper, 2000, "Creating a children's policy agenda in the digital world: Strategies for advocates", *Next Generation* (July): 1-6.  
秋元律郎, 1989, 『都市社会学の源流 —— シカゴ・ソシオロジーの復権』有斐閣.  
船津衛, 1999, 『アメリカ社会学の展開』恒星社厚生閣.

(きのした けいすけ・修士課程)